The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ルワンダの民族紛争とエスニシティ
Author(s)	西村, 篤子
Citation	国際公共政策研究. 2002, 6(2), p. 285-301
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4679
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ルワンダの民族紛争とエスニシティ

The ethnic conflict and ethnicity in Rwanda

西村　篤子*

Atsuko NISHIMURA*

Abstract

The ethnic conflict in Rwanda in 1994 led to massacre of Tutsi by Hutu. In the conflict, many innocent people were involved in the massacre by Hutu ethnicity, and they killed Tutsi because of different ethnicity. The aim of this thesis is to analyze how Tutsi ethnicity and Hutu ethnicity were constructed through not only history after colonization in Rwanda but also before colonization.

キーワード：民族紛争、エスニシティ、エスニック・ナショナリズム、歴史、ルワンダ

Keywords：ethnic conflict, ethnicity, ethnic nationalism, history, Rwanda

* 大阪大学大学院国際公共政策研究科 博士後期課程

はじめに

1994年4月6日、ルワンダで起きた紛争は、人口700万人の国でその人口の一割以上にあたる100万もの人々が数ヶ月のうちに虐殺され、国内外に何百万人もの難民を流出させたという非常に衝撃的な事件であった[1)]。ルワンダにおけるこの紛争は94年に突発的に起きたわけではなく、59年の「社会革命」、63年、73年などと独立前後から繰り返されてきたフツのツチに対する迫害、虐殺などの延長線上に位置付けられるものである。62年の独立後のルワンダは、それぞれのエスニック・グループを基盤とした政党が、政権、資源をめぐって対立を繰り返してきた。この対立は、敵対するエスニック政党の支持者の迫害、虐殺というかたちで露になり、独立前後から続く対立関係が90年代に入り最高潮に達し、94年の大虐殺に発展したのである。

4月6日の大統領機墜落事件をきっかけに、数ヶ月のうちにルワンダ全土に虐殺の波が広がったこの紛争は、多数の一般人の手により虐殺が繰り広げられたという点において、エスニック・ナショナリズムと民族大虐殺の間には深い関わりがあるということは明らかである。しかし、異なったエスニシティが存在するからといってそれだけで紛争勃発につながるわけではない。94年の紛争勃発の引き金となったいくつかの条件が存在する。まず、ルワンダ国内の貧困と高い人口密度に関するの問題が挙げられる[2)]。一次産品の輸出に頼るルワンダでは、1989年の価格暴落により経済は低迷した。さらに、世界銀行の構造調整により価格切り下げが行なわれると一般人の所得は減少し、このことは飢餓問題へと発展したのであった。四国の約1.5倍ほどの国土に人口700万人という高い人口密度は、深刻な食糧不足、土地不足などの問題へ発展し、多くの一般人が、貧困ゆえんに被害者からの物品収奪や、虐殺に協力したことにより与えられる賞金目当てで虐殺に荷担したのであった[3)]。

次に国際社会がルワンダに与えた影響について言及しておく。ルワンダにおける紛争を悪化させたものとして、エジプト、フランス、南アフリカ、アメリカ合衆国、ウガンダなどからの武器供給、軍事援助があったという問題がある[4)]。つまり、武器の量的そして質的拡大により、民間人居住地域への無差別な攻撃や民間人への直接的攻撃が加えられたのであった。また、直接的な影響ではではないが、ルワンダにおける複数政党制導入により民族間の対立

1) 人口の多数派であるフツによる、少数派ツチと穏健派フツに対する迫害、虐殺がなされ、死者はツチが約800,000人、フツが約30,000人であった。難民は94年4月の時点で国外に約7,776,000人、7月の時点で国内に約75,000人を流出させた。(Gerard Prunier, *The Rwanda Crisis: History of genocide*, Columbia University Press, 1995, p. 264)
2) David Newbury, "Understanding Genocide", African Studies Review, Vol. 41, No. 1, 1998, pp. 88-91
3) David Newbury, 1998, *op. cit.*, pp. 83-91
4) 武内進一「誰がルワンダに武器を与えたのか？－NGO による史料調査から」『アフリカ・レポート No. 20』アジア経済研究所、1995

が深刻になったのである[5]。つまり、80年代後半から、資本主義経済、複数政党制を柱とした民主化要求の波がアフリカ大陸にも押し寄せ、ルワンダでもこれを受け入れざるを得なかったということである。当時、北部出身のフツ政権が政権を握っていたルワンダにおいて、複数政党制を導入することは、反政権の中部フツ、またツチを主な構成員としたルワンダ愛国戦線などのエスニック政党のエスニック・ナショナリズムを必要以上に刺激するものであった。当時の国内事情を把握せずに導入されることとなった複数政党制はむしろ、別の大問題を引き起こしてしまったのである。

以上のような諸条件から94年の紛争が勃発し、その被害者数、加害者数から判断して、ルワンダ独立前後からの数々の紛争とは大きく異なるものとなったのであった。つまり、一般人の多くが虐殺の加害者、被害者となったのである。ルワンダの一般的な人々にとって死活問題であった飢餓・貧困、人口密度の問題が、「ツチ」である、「フツ」であるというエスニック・ナショナリズムと結びつけられて、お互いに対する反感、憎悪を抱くようになり、虐殺に荷担したのであった。従って、一般人を虐殺に荷担させたものとしてエスニック・ナショナリズムの存在が重要となってくるのである。

94年当時、ルワンダにおける大虐殺が全世界に報じられた時には、紛争の説明として「多数派部族[6]フツと少数派部族ツチとの500年の対立の歴史」であるという言説が用いられた。つまり、前近代以来続いてきたツチ、フツの対立が94年に大虐殺というかたちで現れてきたとするものである。しかし、この言説は極めて不正確である。そこで、本論文では、今日のルワンダにおいてこれほどにも人々の生活に大きく関わる「ツチ」「フツ」のエスニシティというものがいかに形成されたかという点を歴史的概観により明らかにする。これにより、「ツチ」「フツ」のエスニシティがいかなる問題を現代に及ぼしているかを考察する。

1. 「エスノ・シンボリック」的分析方法

ネイション、ナショナリズム研究の分野において大きく分けて、「近代主義者」と「原初主義者」の二つの対立する理論的立場がある。ルワンダにおけるエスニシティ[7]形成過程について考察する前に、これら二つの立場について言及しておく必要がある。

前者の「近代主義者」の見解によると、ネイション、ナショナリズムは近代化に伴い形成

5) David Newbury, 1998, *op. cit.* pp. 83-91
6) アフリカのエスニック・グループに限ってよく「部族」という表現が用いられるが、本稿では民族という表現を使用することとする。なお、アフリカにおける「部族」と民族の言葉の使い方に関する問題については、武内進一編『調査研究報告書　地域研究部 1997-No. 4－現代アフリカの紛争を理解するために－』アジア経済研究所、1998の第一章、松田素二著「民族対立の社会理論」を参照。
7) ヨーロッパにおける標準的な「ネイション」と区別する為、本稿では、ルワンダのツチ、フツという民族集団に関して、エスニシティという用語を用いる。

された近代における産物であるとしている。周知のように、エルネスト・ゲルナーのナショナリズム論[8]によると、近代において産業化が進み、人や物品の移動、公教育、標準語の普及などにより人々の間にコミュニケーション手段が存在するようになり、そして官僚制度、軍事制度、税制度が整備されることにより、ネイションが形成されたとしている。一方、後者の「原初主義者」の見解によると、ネイションとは、前近代から近代へと継続的に存在してきたものであり、歴史状況によって支配されないものである。従って、言語、人種、宗教、エスニシティ、領土などの「原初的紐帯」が、人類を常に区分してきており、今後もこの状態は続くと考えられているのである[9]。

「近代主義者」と「原初主義者」の対立する議論をもとにアントニー・D・スミスは次のようなナショナリズム分析を示している。スミスは、ネイション、ナショナリズムは近代において成立したが、その成立には前近代に存在した神話、歴史の記憶、象徴、価値などの諸要素が核となっていると主張している。このようなスミスの「エスノ・シンボリック的」[10]分析方法は、「近代主義者」が重要視する工業化、公的教育制度、官僚制度、軍隊制度などの実体的、客観的な要素も重要ではあるが、「原初主義者」が重要視する人々の心の中に存在する主観的な要素である原初的紐帯をも重要視しているのである。

スミスの「エスノ・シンボリック的」分析方法の特徴として重要なものに「エトニ」の概念がある。エトニとは、「父祖の地を認識し、共通の祖先、歴史の記憶とはっきりした文化を共に持っている名前を持つ集団」[11]であり、近代におけるネイション形成の基盤となるものである。「エトニ」形成の条件として以下6つの事項を挙げている。①集合的固有名詞、②共有する父祖、祖先神話、③共有する歴史の記憶、伝統、④宗教、言語などの共通の文化の要素、⑤父祖の地、歴史的領域への想い、⑥共同体への連帯性の存在である。スミスは、これらの諸条件から成る前近代において形成された「エトニ」が基盤となり、近代においてネイションへと形成されていくという説明から分かるように、前近代から近代にかけての持続性を重要視しているのである。

また、スミスはネイション形成には大きく二つの方法があるとして分類している。一つ目は、イギリス、フランスにおけるネイション形成の例であるとして「水平的エトニ」から市民的・領域的なネイションが形成されるというものである。これは、貴族などの上層部の「エトニ」が下層階級にまで普及していき、ネイションを形成するものである。そして二つ目は、

8) Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, Oxford, Basil Blackwell, 1983 アーネスト・ゲルナー著、加藤節監約『民族とナショナリズム』、岩波書店、2000
9) 原初主義者のナショナリズム論に関してはアントニー・D・スミス著、巣山靖司・高城和義　他訳『ネイションとエスニシティ』、名古屋大学出版会、1999、第一章、Umut Özkirimli, *Theories of Nationalism*, Macmillan Press Ltd, London, 2000, pp. 64-74 を参照。
10) アントニー・D・スミス、1999、前掲。
11) 同上、39頁。

東欧やアジア、アフリカ、ラテンアメリカのネイション形成を説明する方法として、「垂直的エトニ」からの民族的・系譜的なネイション形成が挙げられる。これは、もともと大衆的に広く存在してきた「エトニ」を基盤としてネイション形成へと発展する方法である。いずれにせよ、スミスは「エトニ」の概念を用いることにより、ネイションの形成に至る前近代から近代にかけての持続性の説明を可能にしている。また、スミスのいう「水平的エトニ」と「垂直的エトニ」の分類はもちろん西欧と非西欧の分類を明確にしているのだが、それだけではなく、「原初主義者」と「近代主義者」の見解を結びつける役割を果たしている。つまり、「水平的エトニ」からネイションが形成される過程は、前近代において、貴族、聖職者が彼らだけに与えられた特権を媒介として一つの共同体意識や文化を共有していく「水平的」方向への広がりの過程を説明している。この前近代における説明は、歴史上いつの時代にも、つまり前近代においても「ネイション」と呼べる単位を発見することができるという「原初主義者」の立場を肯定するものである。一方、「垂直的エトニ」からネイションが形成される過程は、近代化により、一部の限られた人間集団にあった共同体意識や文化を全体的に下層に広げていく「垂直的」方向への広がりの過程を説明している。この際、公教育制度、標準語の普及、官僚機構、軍事制度、税制度など近代化の諸条件がネイション形成に大きな役割を果たしたという点において「近代主義者」の立場を肯定している。従って、ここにおいても「原初主義者」と「近代主義者」の折衷的立場をとるスミスの見解が明らかになっている。

2. ルワンダにおけるエスニシティ研究

以上三つのナショナリズム論のうち、アフリカのエスニシティ研究の分野において、特にエスニック紛争に関しては「近代主義的」なアプローチをとる方が有用であるとする研究が多くみられる[12)]。現代アフリカでみられる民族紛争や民族対立は、太古から続く対立ではなく、その民族単位や対立の多くは、近代に入ってからの植民地時代に宗主国による統治過程において創り出されたものであるという見解である。ルワンダにおけるエスニシティ研究についても同様に、「原初主義的」な立場[13)]を覆し、植民地時代また独立以降において、「ツチ」「フツ」というエスニック集団が、集団として実体化、固定化され、さらには政治化されたとする「近代主義的」なアプローチを用いた説が主流になってきている[14)]。

12) 戸田真紀子「アフリカ民族紛争の理論化」『日本国際政治学会 vol. 123－転換期のアフリカ』2000, 97頁参照。また、Adebayo Adedeji Editor, *Comprehending and Mastering African Conflicts*, New York, Zed Books, 1999 において多くの著者が「近代主義者」の見解を有用であるとして採用している。

13) ルワンダのエスニシティ形成に関する原初主義的な見解の原型は、Jaques J. Maquet や Alezisi Kagame などの研究者の1960年代の研究成果にみることができる。(Steering Committee of the Joint Evaluation of Emergency Assistance to Rwanda, *"The International Response to Conflict and Genocide: Lessons from the Rwanda Experience", Journal of Humanitarian Assistance* http://www-jha.sps.cam.ac.uk/a/a187.pdf posted on 14 September 1997) の *Study 1: Historical Perspective: Some Explanatory Factors* を参照。)

「原初主義的」な立場をとる「本質主義者」によると、94年に最高潮に達したルワンダにおける民族紛争は、近代以前からの異なった民族アイデンティティが対立の根本原因であると考えられている。この見解によると、最初にルワンダの地には、現在民族構成において1％を占める少数派の狩猟採集民のトゥワが居住しており、次に現在人口の85％を占めるフツが農耕民として到来し、その後14世紀に入り北方から、現在人口の14％を占めるツチが牧畜民として到来し、先住民の両者を征服しルワンダ王国を築いたという歴史認識に基づいている。そもそも出自を異にするこれら三グループ間には、前近代から続く差異が身体的特徴や生活様式などにおいて存在しており、その差異は現在に至っていると考えられている。そして、現在において異なった民族アイデンティティがそれぞれの民族間における紛争を引き起こしていると考えられているのである。

一方、「近代主義的」な立場をとる「道具主義者」の見解によると、紛争の主な原因は植民地時代に形成されたもので、紛争は政治的動員の結果起きたものであると考えられている。つまり、「ツチ」「フツ」というエスニシティが形成されるのは近代に入ってからのことであり、植民地政策により形成されたエスニシティが、独立前後にかけて、政治的目的のために動員された結果、紛争が起こったと考えられているのである。

確かに「近代主義者」が主張するように「ツチ」「フツ」のエスニシティは植民地化の過程で形成されたという説明が有効である。しかし、この「近代主義的」アプローチでは、エスニシティ形成過程は説明できても、1994年の紛争の際、形成されてからほんの一世紀程しか経っていないエスニシティになぜ大衆が動員されたのかという問い[15]に答えられない。従って、「近代主義的」アプローチのみによる分析では欠点があるということに注意しなければならない。形成されてから一世紀も経っていないエスニック・ナショナリズム[16]によって人々が動かされ、虐殺にまで加担させたものとは何であったのか。もちろん、ラジオによる扇動[17]により動員されたという事実もあったであろう。しかし、ここで重要であるのはラジオの扇動を人々が受け入れてしまう状況が存在していたという点である。この問題に取り組むためには、ルワンダにおけるエスニシティの性質がいかなるものであるか分析する必要があ

14) ただし、原初主義者、近代主義者のどちらか一方の分析法によるのではなく両者を融合させた分析が必要であるという意見もある。(Adebayo Adedeji, *op. cit.*, pp. 141-142)

15) この問いに関して武内進一は「紛争の大衆化」という言葉で説明している。教育や雇用の機会を奪われた膨大な数の若者が、絶望的になり、虐殺行為に荷担したという分析である。(武内進一編『現代アフリカの紛争－歴史と主体－』アジア経済研究所、2000、13頁)

16) スミスのナショナリズム論によると、ナショナリズムの概念はネイション・ステイトを形成しようとする運動のみならず、一国内におけるエスニック・グループの自治や独立などを求める運動をも含めている。このようなエスニック・グループの運動をエスニック・ナショナリズムという表現で表す。(Anthony D. Smith, *Nations and Nationalism in a Global Era*, Camblidge, Policy Press, 1995)

17) 当事、事実上フツ強硬派の宣伝放送局であった「ラジオ・ミルコリンヌ」はツチ虐殺を扇動するような内容を放送した。(武内進一「民主化のなかの権力とマスメディア―ラジオ・ミルコリンヌをめぐって」アジア経済研究所『第三世界のマスメディア』明石書店、1995、220-228頁を参照。)

る。そこで、本論文では「ツチ」「フツ」のエスニシティ[18]がどの時期にいかにして形成されたのかという点について明らかにする。その際、前近代つまり植民地期以前の状況がエスニシティ形成にどのような影響を及ぼしているかという点に注意しながら考察したい。従って、「原初主義者」、「近代主義者」のどちらか一方だけの分析に基づくのではなく、両者の折衷的な立場をとるスミスの「エスノ・シンボリック的」な分析方法を適用させて、ツチ、フツのエスニシティ形成過程を明らかにする。そこで、以下ではルワンダにおけるエスニシティ形成過程について歴史的に考察し、エスニシティのもつ前近代的な要素を明らかにする。

3. ルワンダにおけるエスニシティの起源

ルワンダにおけるエスニシティの起源に関する分析は、北方起源説に基づいた前述の「本質主義者」の見解にみられる。同説では、フツの起源をバンツー系言語の普及過程に、ツチの起源を紀元後10世紀頃に生じたといわれる北方系のハム系牧畜民の南下に求めてきた。しかし、この従来の説を覆す説が近年出てきている[19]。これによると、ツチもフツももともとの出自は同じで、社会生活の中においてパトロンとクライアント[20]の違いで分化が進んでいった結果ツチ、フツという異なったグループが形成されたとする見解である。

そこでまず、ツチが北方から南下してきたという北方起源説[21]について検討する。この説は1960年代の研究者 Manquet や d'Hertefelt らによるものであるが、この説の根拠となる資料としてツチが北方から到来したと伝えているルワンダの口頭伝承と、考古学的資料を用いている。口頭伝承は先に挙げたように、ハム系の牧畜民であるツチが北方から到来し、先住していたトゥワとフツを支配下に置くことにより征服王朝を築いたという内容を伝えるものである。考古学的資料としては、それまでこの地域で共通して用いられ、バンツー系諸語を話す集団が使用していたと思われるウレウェ土器群が紀元後二千年紀に入って、急速に他のタイプの土器に取って代わられたことが指摘されている。この土器の変化が、征服民到来ということを示していると解釈されたのである。

しかし近年になり、この北方起源説に疑問を呈する研究がなされてきている。それによる

18) 本論文では、ツチ、フツのエスニシティについて主に考察するが、トゥワについても念頭にはある。最も少数派のトゥワは、他の二つの民族から差別を受けてきており、社会的地位も低く、94年の紛争の際には、貧しいトゥワを殺害しても何の利益にもつながらないとして、「ツチ、フツの対立構造」から外されていた。(ツチ、フツによるトゥワへの差別については Alison Des Forges, *Leave None to Tell the Story: Genocide in Rwanda*, Gilles Press, 1999, New York, pp. 33-34、Christopher C. Taylor, *Sacrifice as Terror: The Rwandan Genocide of 1994*, Oxford, Berg, 1999, pp. 67-71 を参照。)

19) Christopher C. Taylor, *op. cit.*, pp. 71-75

20) パトロン・クライアント関係はアフリカの各地で見られる貢納関係であり、現在でも多くのアフリカの国々で社会の骨組みをなしている。(山口圭介『ナショナリズムと現代 [改訂版]』九州大学出版会、1992、第四章 アフリカの歴史と国家、参照。)

21) Jaques J. Maquet, *The Premise of Inequality in Rwanda*, International African Institute, London, 1961

と、口頭伝承に関しては、ヨーロッパ人の関心に合わせる形で語られ、また採集されたという可能性が指摘されている。また、考古学調査が明らかにした紀元後第二千年紀に入ってからの土器の変化については、征服民到来という文脈で解釈するのではなく、社会経済的な変化が起こったと解釈するのが妥当であろうと指摘されている[22]。

19世紀の探検時代、アフリカ中部の大湖地域の諸王国における支配階級が北方起源であると最初に主張したのはスピーク（John Henning Speke）であった[23]。スピークは探検記 *Journal of the Discovery of the Source of the Nile*（1863年）のなかでルワンダの北方起源説を唱えている。彼のこの説は当時のヨーロッパ人中心の人種観であったハム説[24]を採用したものであった。当時広く受け入れられていたハム説によると、あらゆるアフリカの文明はコーカソイドの血が混じったハムによって伝播され、その祖先はエチオピアであるとされた。そして、ハムは他のアフリカ人より知的にも身体的[25]にも優れた能力を有しているとされていた。従って、ルワンダに関して言及すれば、コーカソイドの血が混じったハムつまりツチは、ネグロイドのフツやトゥワより身体的に魅力があり、優越していたということになる。

しかし、この北方起源説は比較歴史言語学の手法を用いた研究者により根本的な批判を受けている。この手法によると、大湖地域の北方に居住していたナイル・サハラ語族東・中央スーダン諸語の話者つまり「ツチ」が、ニジェール・コルドファン語族バンツー系諸語の話者「フツ」に文化的影響を与えたのはもっと早い時期であったと推定されている[26]。つまり、北方起源説が唱えるように紀元後第二千年紀初期にツチが南下したという証拠は言語学的には得られないのである。D. L. Schoenbrun の分析[27]によると、紀元前1000年から500年頃には、中央スーダン系、東スーダン系、南クシ系、バンツー系諸語の話者が大湖地域に居住し、それぞれ異なる生活形態を維持していたようである。中央スーダン系、東スーダン系諸語の話者は穀物栽培と牧畜を組み合わせた生業構造を持ち、南クシ系諸語の話者はより牧畜に依存した生業構造を持っていた。バンツー系諸語の話者は根茎作物を中心とする食料生産の手段を有し、漁労や小家畜も行なっていた。これらの集団間には互いに交流が持たれていたようである。紀元前500年以降になり、大湖地域においてバンツー系諸語の話者集団は、他の集団から農業技術を取り入れ、統合的な食料生産制度の確立に成功したとされている。また同

22) David Newbury, *Trick Cyclists? Recontextualizing Rwandan Dynastic Chronology, "History in Africa"*, vol. 21, 1994, pp. 191-217
23) スピークは、聖書と東アフリカでの探検を通しての彼の観察結果より、この説を導き出したとされている。(Christopher C. Taylor, *op. cit.*, p. 59)
24) *Ibid.*, pp. 58-67
25) エチオピア辺りのアフリカ北方地域でみられる身体的特徴として、背が高く、皮膚の色が比較的薄いといったことが挙げられる。ハム説によるとこれらの身体的特徴を兼ね備えていることが、比較的背が低く、より黒い皮膚を身体的特徴としているネグロイドより優れているとされた。(*Ibid.*)
26) 武内、2000、前掲、252頁
27) David L. Schoenbrun, *A Green Place, a Good Place: Agrarian Change, Gender, and Social Identity in the Great Lakes Region to the 15th Century*, 1998

時期にバンツー系諸語の話者集団は鉄器生産技術も手に入れ、その活動の場を大湖地域全域に広げた。そして、紀元後500年頃までにはバンツー系諸語の話者が有する言語、文化が支配的になったとしている。このように、同分析と北方起源説を照らし合わせてみても、両者の間には食い違いがみられるのである。

以上のように、従来のツチ北方起源説が論拠を失いつつあるなかで、より内発的な社会の変化に重点を置いた「状況変化型」研究結果が発表されている[28]。同見解によると、ツチ、フツといった分類はそもそも曖昧なものであり、生活形態や経済状況などに応じて形成されてきたものであるとしている。従って、出自に関しては、確実に異なっていたとはいえないのではないかと思われる。しかし、従来の北方起源説は、実際ルワンダ社会において口頭伝承[29]によって言い伝えられてきたという点において重要な問題を呈している。同説は、科学的に立証することは難しい説ではあるが、長年ルワンダの人々の心の奥深くに存在してきたのである。実際、ルワンダについての文献を読むと、科学的根拠のなさを指摘しながらでも同説についての言及がたいていなされているのである。たとえ事実とは異なっていようとも、長年人々の間で口頭伝承として言い伝えられてきた北方起源説は後のルワンダにおける歴史観形成に大きく影響を及ぼしているのである。起源というものがいかにして後々の世界で語り継がれ、人々の間で歴史として認識されていくかという点が重要である。従って本稿では、ルワンダにおけるツチ、フツの起源が前近代、近代においていかに伝えられ後世に影響を及ぼしたのかという点に重点を置くこととする。

4. 近代化とエスニシティ形成
—ドイツ、ベルギーの植民地政策による「ツチ」「フツ」エスニシティ形成過程—

先に紹介した「近代主義者」の見解に明らかなように、ルワンダのエスニシティは植民地政策を通して、それぞれのエスニック集団が形成され、固定化され、独立過程に政治化されたとする説明が主流となっている。そこで、次に、植民地期の統治政策がいかにして両者の境界を明確化し、それぞれのアイデンティティを形成させたかという点について考察する。

1898年、ルワンダはドイツの植民地となり、その後、第一次世界大戦後に国際連盟の委任統治領としてベルギーが植民地経営を行なうこととなったのである[30]。ドイツがルアンダ

28) 植民地以前のルワンダ社会を「状況変化型」であると分析している研究者として、Vansina, d'Hertefelt, C. Newbury, D. Newbury などが挙げられる。(Steering Committee of the Joint Evaluation of Emergency Assistance to Rwanda, *op. cit.*, Study 1 参照。)

29) 口頭伝承に関しては植民地化の過程でヨーロッパ人によって改竄されたという説もある。(武内、2000、前掲、254頁。)

30) 植民地期のルワンダ社会については、Gerard Prunier, *op. cit.*, pp. 23-40 を参照。

（ドイツ植民地下にあった当時の名称）を植民地化して間もなく、ある行政官が「ルワンダ封建社会説」を唱えた[31]。同説によると、ルアンダ社会は「支配者であるツチ」が「被支配者であるフツ」を支配することにより成り立った封建社会であるとしていた。確かに、ドイツがルアンダを植民地化する際に、同王国はツチが全土を統治する社会に思われたのではあろうが、この説を唱えた真の目的は、ドイツがルアンダ王国を保全して効率よく統治するためであった。そして、この主張に沿った植民地政策が実施されることとなったのである。ルワンダ王国の支配は官僚制を有する中央集権的なものに強化され、「ツチ、フツの関係はいわゆる「封建的な主従関係」に作り変えられていったのである。この「ツチ・フツの支配・被支配関係」や、「封建社会としてのこれまでのルワンダ王国の歴史」が、キリスト教カソリックの教育機関で「正しい歴史」として教えられたのである。またカソリックの宣教師は前述のハム説を普及させたのである[32]。このことにより、「ツチは支配者として優れている」という認識、「ツチ対フツの支配者対被支配者の関係」が確実なものとして造りだされたのである。この結果、始めは一行政官の主張として作り出されたフィクションのツチ・フツ両者関係が、教育機関で広められ、年数を経るに従い固定化され、次第にツチ、フツの間に反感、憎悪の念が形成され膨らんでいくこととなったのである。このことは、ネイション形成に関して「近代主義者」であるゲルナーが主張するように、公的教育制度の普及により広くルアンダ国内一般に共通の価値観、歴史観を共有させることが出来た結果であるとみることができる。しかし、ドイツがルアンダを植民地支配下においてその支配体系を確立する前に、第一次世界大戦が勃発し、1916年にドイツ軍がルアンダ、ウルンジから撤退すると、代わって同地をベルギー軍が占領することとなったのである。

ドイツによる植民地化の後、引続き植民地経営を行なったベルギーもまたルワンダ王国の支配体制を「ツチがフツを支配する」体制であると理解し、王国の支配体制を利用して統治しようとする間接統治政策をとった。

ベルギー行政府の政策のなかでも、現在にまで影響を及ぼしているものとして、34年から35年にかけて確立された身分証明書制度に注目すべきである。この制度により、行政府は、ルワンダ人をツチ、フツ、トゥワに区分し、それを身分証明書に記載させたのである。その分類基準としては、ツチは長身で比較的肌の色が白い、一方フツは単身で皮膚の色がより黒いという身体的な諸条件によって区別されたという説がある[33]。確かに、ルワンダにおいて両者のような身体的特徴を持った人々が存在したようではある[34]。しかし、実際のところ確

31）宇佐美久美子『アフリカ史の意味』山川出版社、1996、20〜21頁
32）Christopher C. Taylor, *op. cit.*, p. 60
33）頭の大きさ、瞳の様子など細かな身体的特徴を計って「ツチ」「フツ」の分類をしている写真を見ることができる。（Amnesty International, *Rwanda*, http://www.amnesty-usa.org/group/rwanda/index.html 参照。）
34）*Ibid.*, following p. 174、写真参照。例えば、長身で比較的皮膚の色が薄い典型的なツチを見ることが出来る。

実にツチとフツとを分ける明確な身体的基準など存在しなかったのである。従って、身体的特徴によって区別されたというこの分類基準は、両者の間には混交[35]が進み大部分の人々は外見で区別するのは難しかったという点を考慮に入れると確実なものではなかったのである。結局、多数のグレーゾーンが存在し、この問題に関しては、牛を10頭以上有する者をツチと見なすといった措置がとられたのである。ここで注意しなくてはならない点は、牛を有する裕福なフツもいれば、全く牛を持たないツチもいたということである。

このようにルワンダ人を「ツチ」と「フツ」に区別した後、ベルギーは「ツチ」であるとされた人々を支配層として国家機構の中枢に置いた。そして、教育面でも彼らを優遇し、「ツチ」に対して公用語であるフランス語教育がなされたのである。このことは、結果的に近代において、前近代から存続してきた「ツチ」アイデンティティを強化させたのではないかと考えられる。つまり、前近代のルワンダ王国では「ツチ」も「ツチでない人々（フツ）」も同じキニャルワンダ語を話してきており、両者の間には言語使用という点で共通点がみられたのである。しかし、植民地政策により、「ツチ」にのみフランス語という「フツ」とは異なる特別の言語が与えられたことにより、「ツチ」アイデンティティの強化につながったと考えられる。

また、ベルギーによる植民地政策下では、行政上の重要なポストにはツチが据えられ[36]、フツには補助的な役職しか与えられなかった。さらには、これらの教育面、職業面での格差は固定化し、両者の間に経済的な格差をも作り出すこととなったのである。このことは、前近代においてはそれほど明確ではなかった「ツチ」、「ツチでない人々（フツ）」両者の間に、異なった生活様式を生み出したといえる。

これらの植民地政策を通して、植民地期後期にはツチとフツの間に確固たる境界線が引かれ、政治的な格差が形成されていったのである。そして、植民地化以前とは対照的に、ここにおいて「ツチでない者」「差別された者」としてのフツ・アイデンティティが明確に形成され、広汎に共有されていくこととなったのである。

以上のように「ツチ」「フツ」それぞれのエスニシティは、「近代主義者」が主張するように、近代化つまりルワンダの場合は19世紀後半の植民地政策によって形成され確立されたものであるといえよう。

35) 但し、Vansina の研究によると、ルワンダ王国の支配者層にあったツチは、王国500年間の年表より歴代全ての王は誰一人としてフツの女性と結婚していないとのことである。(Steering Committee of the Joint Evaluation of Emergency Assistance to Rwanda, *op. cit.*, Study 1, p. 25 参照。)

36) 植民地後期の1959年までに、559人のチーフのうち549人がツチであった。(Gerard Prunier, *op. cit.*, p27)

5. 前近代ルワンダにおけるツチとフツ
—ルワンダ王国におけるツチ、フツについて—

前述のように、近代において植民地政策により確固たるエスニシティが形成されたのは明らかである。しかし、その性質を明確にするため前近代のルワンダについて分析する必要がある。そこで以下では、ルワンダ王国支配期のツチとフツについて言及する。

ルワンダ王国成立に先駆けて、牧畜に重きをおく集団と、農耕に重きをおく集団の存在が徐々に現れてきた。同時期に土地への権利主体としての父系リネージが出現し、土地配分や特定領域の防衛などの政治機能を担ったリネージはルワンダ王国形成の第一段階の役割を果たした[37]。

前述の北方起源説にみられるように、14世紀から15世紀にかけて少数の牧畜民ツチが多数の農耕民フツを支配することによりルワンダ王国が成立したと一般的に言われるが、牧畜民による農耕民の征服という事態は、ルワンダ王国の成立と拡大過程のなかで考慮されるべきことであると思われる。つまり、ルワンダ王国の拡大は、ツチの有力リネージであったニギニャリネージが他の地域へ支配権を広げるなかで徐々に生じてきたのであると考えられる。実際、歴代の王による周辺地域への征服の歴史を伝えている口頭伝承[38]もあり、それを全て鵜呑みにすることはできないにしても、王国の拡大過程で征服が行なわれた可能性は否定できない。また、ツチによるフツ、トゥワの支配に関する神話も存在する。一例を挙げると次のような神話がある。

> ギハンガ王がガツチ、ガフツ、ガトゥワの三人の息子にそれぞれ、器に一杯のミルクを預け、翌朝自分が戻って来るまでの間一晩中見張っておくように頼んだ。早くも空腹感に耐えきれなくなったガトゥワは、彼の担当させられたポットのミルクを飲み干し眠りに入ってしまった。疲労に耐えられなくなってきたガフツは、居眠りを始め、そうしているうちにミルクの入った器からいくらか溢してしまった。ガツチのみが、空腹にも疲労にも耐え、寝ずに番をし、翌日ギハンガ王に器に一杯のミルクを差し出すことができた。そして、ガツチのみが彼のミルクを守ることができたので、王はガツチにルワンダを統治する権利と牛を所有する権利を与えた。ガフツはガツチの命令に従うものとして、ガツチから与えられた牛を所有することを許された。あわれなガトゥワに関しては、政治に関しても牛の所有に関してもどちらの権利も剝奪されて当然だとされた[39]。

37) Catharine Newbury, *The Cohesion of Oppression: Clientship and Ethnicity in Rwannda, 1860-1960*, New York, Columbia University Press, 1988

38) 武内、2000、前掲、285頁。ルワンダの口頭伝承には、多くの「フツ小王国」の征服が記録されている。ルワンダ王国が周辺地に勢力を拡大させる過程で、各地での抵抗を受けたという記録もみられる。

この神話によると、ルワンダを築いたとされる伝説の王ギハンガが、ツチ、フツ、トゥワの三人の息子に仕事を与え、ツチのみがうまくやり遂げたのでその後のルワンダ社会の統治を任せたという内容の神話であり、この種類の神話はルワンダ各地で収集されている[40]。例えば、上記の神話と話の筋は同じだが、話の設定が異なるものとして次のようなものもある。

> ルワンダで人間の起源とされているカジカムントゥの子供の中にガツチ、ガフツ、ガトゥワという3人の子供がいた。しかし、ガトゥワは彼の兄弟を殺してしまったが為に父親に放逐されてしまった。ガフツは父親の後継者として選ばれ、大切な任務を遂行するように命じられていたのだが、食べ過ぎで寝過ごしてしまい、父親の必要としている情報収集に失敗したのである。一方ガツチは持ち前の真面目さと賢明さでその任務をやってのけたのである。そこで父親カジカムントゥはガツチを兄弟の中でのチーフとして任命した[41]。

このようにルワンダで言い伝えられてきた神話のなかでは、統治能力があるとされたツチという支配者層が存在し、残りのフツ、トゥワの人々を統治下においていたのである。

また、実際ツチを支配者層とするルワンダ王国の系譜が存在している。ただし、ルワンダ王国の成立と王の系譜についてはさまざまな説があり[42]、存在が信じられている最初の王の即位を A. Kagame は1312年、Vansina は1458年、Nkurikiyimfura は1468年、Rennie は1532年としており、ルワンダ王国の成立年代は一応14から15世紀と考えられてきたが、確かではない。しかし、系譜の存在はルワンダ王国の支配者層にいたツチの間に共有する父祖、共通の歴史の記憶、また共同体への連帯感を形成するのに大きな役割を果たしたのではないかと考えられる。

ルワンダ王国の統治制度[43]は次のようになる。王国の頂点には王（umwaami：現在でも公用語となっているキニャルワンダ語の表記）が存在し、国家は彼に属すると考えられていた。そして、王は統治にあたっては専制的に振舞うのではなく、アビイル（abiiru）という王の顧問集団の支持を必要とした。国土は州（ubutaka）に分割され、統治のための大チーフが任命された。国土はまた県に分割され、王が任命する県チーフによって統治された。大チーフにはいつもツチが任命された。一方、県チーフに関しては、三つに分かれており、牧場の境界線を定める担当の牧場チーフ（mutwale wa igikingi）はいつもツチから、農業用地と税を担当する土地チーフ（mutwale wa buttaka）はいつもフツから、住民の管理と国王軍の徴兵を担当する軍チーフ（mutwale wa ingabo）はたいていツチから選ばれていた。

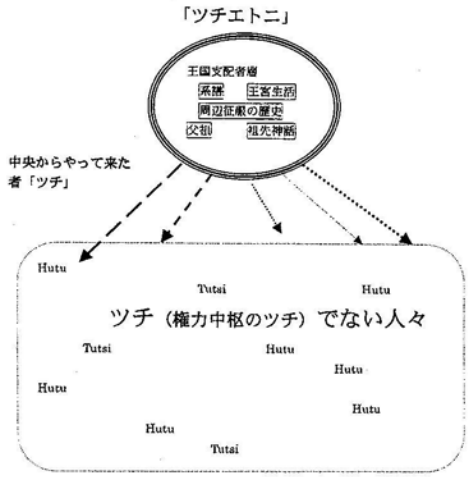
---

39) Christopher C. Taylor, *op. cit.*, pp. 75-76
40) *Ibid.*
41) J. J. Maqet, edited with and introduction by Paryll Forde, *African Worlds: Studies in the Cosmological Ideas and Social Values of African Peoples*, International African Institute, Oxford University Press, 1960, pp. 173-174
42) 武内、2000、前掲、263頁、表1参照。本稿では Vansina の説をとる。
43) Gerard Prunier, *op. cit.*, pp. 9-16 を参照。

ルワンダ王国の領土が大幅に拡張し、広く国内にその影響を与えるようになるのは13代(12代）王のチリマ・ルジュギラ期（Vansina の研究によると1744年から1768年まで）以降である。彼は東部のンドルワとギサカに遠征し、両地に損害を与えた。しかし、王国の影響下に入った後も両地は反乱を繰り返し、領土の拡張を行なったとは言っても明確な境界線が引けるわけでもなかったのである。ルワンダ王国の版図が現在の国境に近いかたちにまで拡大した18代（17代）キゲリ・ルワアブギリ王の治世下（Vansina の研究によると1860年から1895年まで）の時期ですら、統治に関して一定の成功は収めたが王国内外で反乱が絶えなかった。結局、ルワンダ王国の領土が確定するのは植民地化によってである。

このように、「支配者ツチによる統治」の様子が感じとれるルワンダ王国であるが、支配構造について検討してみたい。先にも述べたように1960年代まで、植民地期以前のルワンダ王国について主流な見解となっていたのは次のようなものであった。ルワンダ王国では、ツチが中枢を占める統治がなされ、ツチのチーフが土地保有権を得る制度が成立し、ツチとフツとの支配従属構造がパトロン・クライアント関係によって固定化されていたという見解である。しかし、植民地期以前に「ツチ」による「フツ」の支配構造が出来上がっていたかという点にはいくらか検討の余地がある。また、ここで注意しなければならない点がある。つまり全てのツチの血縁集団リネージが支配者層の貴族であったわけではなく、権力の中枢にいたのは限られた人々だけであったのである。さらに、王国成立当初は現代のような「ツチ」「フツ」という民族意識なるものは形成されておらず、権力の中枢にいた一部のツチを除き、その分類すら確固たるものとはなっていなかったのである。図1に示すように、支配者層にあった一部の有力ツチが、フツやツチを含む「権力中枢のツチでない人々」とされた人々を比較的緩やかな支配関係でもって統治していたのである。

図1 （筆者作成） 前近代におけるツチ、フツ—ルワンダ王国期—



C. Newbury の研究によると、植民地期以前のルワンダ王国において、住民のアイデンティティの単位であったのはツチ、フツといったエスニシティではなく、リネージにあった。つまり日常生活で重要な意味を持ったのはどのリネージに属するかであり、ツチ、フツという区分はあまり重要ではなかった。特に、C. Newbury が調査を行なったルワンダ西部は王国の周辺地域であったため「フツ」アイデンティティといったような単位は明確に存在していなかったようである。また、同地では「ツチ」というカテゴリーは「中央からやって来た者」という意味合いで捉えられたにすぎなかったのである。また先に挙げたチリマ・ルジュギラ王の遠征に反対し各地が反乱を起こした例や、キゲリ・ルワアブギリ王の時代の反乱は、土地権利が土着のリネージの手にあり、王国は容易に統一的な統治制度を確立することはできなかったことを示している[44]。またこの時期のパトロン・クライアント関係について C. Newbury の分析によると、確かに19世紀半ばのキゲリ・ルワアブギリ王の治世下において庇護と引き換えの貢納関係が発展したのだが、この関係はツチとツチとの関係であって、パトロン・クライアント関係がツチとフツとの間に急速に広まるのはこの後の植民地期のことである。

従って、たとえ統治構造の中枢にツチがおり、彼らが賦役や貢納を得ていたとしても全てのツチがそのような富の配分にあずかれたわけではなかったのである。ツチのなかにも貧しい者はいたし、フツのなかにも豊かな者もいたのである。このことはまた両者の混交を促したと考えられる。

以上のことから、植民地期以前のルワンダ王国における「ツチ」「フツ」とは次のようになる。まず、「ツチ」とはルワンダ王国の形成過程に生まれた支配集団であるといえよう。「ツチ」アイデンティティの形成と発展は王宮による支配の拡大、強化と密接に結びついていたのである。「ツチエトニ」の形成に関しては、先に挙げたスミスの分類によると「水平的エトニ」に分類することが出来る。この際、ルワンダ王国の支配者層にあったツチのなかに周辺地域を支配する集団としての「ツチエトニ」が形成されていったのである。「ツチ」という集合的固有名詞を有し、同王国の周辺地域への遠征を伝える口頭伝承などの歴史の記憶を共有し、王国の系譜にみてとれるように共有する父祖や祖先神話を持ち、共通の文化、共通の生活様式の中で、共同体への連帯感を有していく過程で「ツチエトニ」が確立していったのであった。

一方、前近代において「フツエトニ」なるものが存在していたかというと、「フツ」とは「ツチの残余」として、支配者層にいなかったツチも含めて「ツチでない人々」のことを指すのみで、明確な「フツ」アイデンティティの形成にはまだ至ってなかったと考えられる。実際、植民地期以前の前近代の段階において、ルワンダ王国の支配者層にいたツチを除くと、ツチ

44) Catharine Newbury, 1988, *op. cit.*, pp. 74-78

とフツ概念の境界は曖昧なものであった。また、支配者層にいたツチ以外の人々の間には「フツとしての一体感」のようなものはまだ存在しなかったのである。ただ、この時点では、「権力中枢にいたツチ」が支配者としての集団性を現してきたことにより、それ以外の人々の間に「自分たちはツチでない人々である」という意識が出てきていたようである。それは、同じ生活様式を持ち、ツチによる征服を受け、それに対する抵抗などを通して徐々に現れてきたのである。従って、「ツチエトニ」ほど明確なものではないが、ルワンダ王国後期になるにつれて徐々にではあるが、非常に曖昧な「フツエトニ」が形成されていったのである。スミスの分析方法に当てはめると、前近代の王国時代に形成された曖昧な「フツエトニ」を基盤として、近代における植民政策によって、「垂直的エトニ」からフツエスニシティティが形成されていったと説明できる。

おわりに

植民地政策を通して形成されたそれぞれのエスニシティは、独立に向う過程で、政治体制をめぐって対立を深め、59年の「社会革命」、63年、73年のフツのツチに対する迫害、虐殺などの事件[45]へと発展していったのである。94年のルワンダにおける民族紛争はまさしく、この対立が最高潮に達したと考えることができる。

植民地政策により確固たるものと形成された「ツチ」「フツ」のエスニシティであったが、しかし、形成されてから一世紀も経過していないエスニシティに人々がこれほどまでに大きな影響を受けた理由は何であったのであろうか。その答えは、近代に入ってから何もないところにエスニシティを突然に創造したのではないということである。つまり、「ツチ」に関しては前近代から「ツチエスニシティ」の原型が存在していたのであった。また、「フツエスニシティ」に関しても、これは近代において幾分か鍛造された部分もあるように思われるが、前近代において曖昧ではあるが原型となるものが存在していたのである。従って、近代におけるエスニシティ形成にあたって、前近代からの「エスニックな土台」[46]が存在しており、その土台を基盤としてエスニシティが形成されたのである。「エスニックな土台」が存在した場所としては、北方起源説を伝える口頭伝承や、王国時期のツチによる支配を伝える神話などの中にみることができる。前述のように、ルワンダにおけるエスニシティの起源は同じではないかという科学的に有効な見解も存在するが、それでもこれらの要素は、次世代に継承され[47]、植民地化の過程ではステレオタイプ化され、それぞれの価値観、アイデンティティを

45) Gerard Prunier, *op. cit.*, pp. 41-92 を参照。
46) アンソニー・D・スミス、1999、前掲、21〜23頁。
47) J. J. Maqet, *op. cit.*, pp. 185-187

形成してきたのであった。

94年にルワンダで起きた紛争は、ツチ、フツ太古からの500年来の対立ではなく、現代における政治、経済的な問題が引き金となり起きた事件である。しかし、現代においてその対立する集団は、前近代においてそれぞれのエスニシティの原型となるものが存在し、その要素を利用した近代化つまり植民地政策により確固たるものとして形成されたのである。このようにして形成されたエスニック集団を単位として政党が作られ、現代において政治的な対立を繰り広げているのである。つまり、大虐殺という現在における問題が前近代から続く問題と大きく関わっているのである。従って、現代における諸問題を分析し解決するにあたって、前近代の歴史にまで立ち戻って分析する必要がある。